

南画礼賛

ミューゼ浜口陽三企画展 「浜口陽三と白倉嘉入 満ちてくる光」展講演

2026年6月27日（土） 林 浩平



このところ南画、あるいは文人画ですけども、その世界のことにあれこれ考えたりしております。
今日は、その南画についてのお話をさせていただこうと思います

■南画とは何か

南画とは一体どういう絵を指すのか、こちら辺があんまり馴染みのない方もおられると思うので、定義と解説をしないといけません。そのことを考える上で、中国のことをちょっと触れておく必要があります。中国は、文学に関しては唐の時代ですよね。杜甫がいて、李白がいて、白楽天がいて、『唐詩選』というものも作られてます。けれど美術に関しては、唐の次の宋なんですよ。北宋の頃—西暦で言ったら960年から1279年ですけども、徽宗皇帝という方がいましたね。天才的です、皇帝でありながら、もう完全に画家ですよ。日本にも後鳥羽院という、和歌が抜群に上手い天皇はいましたけども、徽宗は本当に絵が上手い。そのおかげで北宋は潰れちゃうわけですよ。で、息子が南に逃げて南宋を建てて、北宋、南宋という、宋でありながら2つのかなり違う文化ができたのです。その宋の時代が美術史においては大事になってくるわけです。

宮崎法子先生が『花鳥山水画を読み解く』という、サントリー学芸大賞取った本の中にまとめてらっしゃるんですけど、宋の時代において、いわゆる科挙の制度が徹底化して、国の社会とか文化の中心に、士大夫、簡単に言えば文人官僚ですよ、科挙の試験は皆さんご存知のように、大体詩を書くんですよ。一晩ぐらい徹夜してね。そういう、詩を書くことによってパスした連中ってというのは基本的に文人なわけです。自分の表現として漢詩も書けば、絵も描く。宋の時代において、文人画的世界が用意されていたというわけですよ。そういう中で、雅俗の概念が価値の基準となったと。

それからもう一つは、これは極めて技術的な側面で、宋の時代になって水墨画の技法がぐっと伸びたらしいですね。唐の時代までは中心であった山水画は青緑山水。青とか緑の色とか、鉱物顔料から取った、顔料を使った絵なんですね。それに対して宋の時代では水墨画。墨を水で溶かして、いわゆる筆のタッチを生かした、山や樹木、水や大気をも描き上げるような水墨画の技法が展開した結果、いわゆる水墨山水が生まれます。我々が山水画ってまずイメージするのは水墨山水ですね。その世界が完成されていったという、そういう社会的な背景と技術的な背景もあって、宋の時代に、ぐっと美術の世界が発展した。当然宮廷画家たちも重んじられて、どんどん絵の文化ってものが積み重なっていくわけですね。

で、宋が一旦滅びて南に逃げて行って、北宋から南宋になった。絵の世界も、微妙に変化ができてくるわけですね。北宋の場合は宮廷画壇が中心だったので、プロフェッショナルな宮廷画家たちが美術界の中心にいました。それに対して、南宋の場合は士大夫の世界がもっと徹底されて、純粹に水墨画のエッセンスを追いつめるようになってきた。北宋の場合はテーマが割合、国家イデオロギー的なものが重んじられた。中国は世界の中心というので、全景的などーっと広い風景を描くものが好まれ、それに対して南宋になってきたら、風景の持っている美しさ、あるいは「気韻生動」という四字熟語がありますよね。東洋の絵を語る場合に大変重要なキーワードですが、生き生きとした生命感や、高い気品と風格がそこから感じ取れるような状態を気韻生動と言います。そういうものを山水画に求めようとする。これはまあ。テーマ的にもある種のユートピア追求ですからね。仙人が住んでる、俗界を離れた、その風景、山の風景全体の中に、そういった気韻生動するものを、換言すればポエジーを感じ取るわけです。

で、そういう意味で、南宋画において水墨山水の理想形が出てきたと言っていいんじゃないでしょうか。そうして、その南宋画が日本に入ってきたことによって、江戸時代に一もちろんそれ以前にも日本の、特に禅僧たちは中国に渡って絵の勉強をしています。雪舟なんかもそうでしたけども。江戸時代になって、南宋画のスタイルがまず入ってきて、それを受け入れた日本の江戸の知識人たちが、それにいくつかのエッセンスをちゃんぽんするわけです。そして日本独自の南画というものが生まれるわけですね。

日本独自の南画の世界とは、よく言われるのは、その南宋画に加えて、長崎に2、3年いた沈南蘋という職業画家の影響とか、あるいはヨーロッパの遠近法、そんなものを取り入れちゃう。いろんな様式も、琳派も取り入れる。南画とは南宋画に由来し、これを日本的に解釈したもので、江戸時代中期以降に展開を見た絵画様式、文人画とも言う、と、そういう、まあ、定義ができると思います。

それで、宮崎法子さんの本の中にこんなくだりがあります。ちょっとこれ読んでみたいと思います。「北宋の宋迪（そうてき）〔「瀟湘八景図」の創始者〕が、鑑賞者としてばかりでなく絵筆をとり、絵画を描いた時、士大夫たちにとっての必須の教養や幅広い趣味生活――書法、詩文をはじめ琴などの演奏とその知識、喫茶、聞香（ぶんこう）、庭園園芸、生け花、文房具・書物・書画骨董・奇石への愛好と蒐集等々のなかに、絵画制作が加わることになったのである。」（宮崎法子『花鳥・山水画を読み解く―中国絵画の意味』）

士大夫の幅の広い趣味生活。絵も描く、詩も読む、それからいろんなものを集める。大体文人って文房具に対するこだわりがあるわけですね。だから印を彫ったりしますね。いろんな筆を集めたりとかも。そういう生活パターン、いわゆる文人らしい。それがこうして瀟湘八景を描くことによって生まれてきたというくだりがあったので、ここは日本の我々もちょっと問題にしたいですね。日本の南画の世界に関しても、こういう一種のライフスタイルが受け継がれていくってところを参考までに確認しておきたいなと思います。



さあ、そして日本に、南画が誕生します。南画の創始者たちということでトップに来るのは何と言っても祇園南海でしょうね。この人は画家であり、書家でもあります。そして漢詩人でもあります。それから柳沢淇園。淇園はとにかく何でもできた。絵もそう、文学もそう、和歌も作る、漢詩も作る。それから彼は武芸の方も、弓とかかなりの腕前で、十六の部門で人の先生になれたというすごいですね。それから彭城 百川、服部南郭です。服部南郭という人は荻生徂徠の弟子の、二枚看板の一人でしょうね。荻生徂徠は何人も弟子がいたんだけど、メジャーな弟子は、この服部南郭と太宰春台です。で、徂徠という人は儒者であり、だから政治家の政治顧問ですが、文学好きで、大変寛容だったのでね、みんな、したいことやれって言って。江戸時代の日本人に漢詩を作ることを広めたんです。漢詩の入門書をいっぱい書いてね。当時は日本もようやく落ち着いてきて豊かになってきたので、和歌と俳句、狂歌、川柳とかはあるにしても、それに加えて漢詩、その作詩の入門書なんかを荻生徂徠が結構流通させたのです。その文芸の方の系譜を継いだのが服部南郭です。南郭も江戸に塾を出したら、何百人、何千人という弟子が来たという具合です。まあ江戸は私塾流行りではあったんですけどもね。

で、この四人が創始者グループとされ、その後に完成形を見せるのが、池大雅と与謝蕪村。この二人が京都で活躍する18世紀の後半が南画の最高潮の時代と言っていいんじゃないでしょうか。与謝蕪村《夜色楼台図》。京都の町に雪が積もっている。詩人の三好達治が「太郎を眠らせ、太郎の屋根に雪降りつむ」、あの詩を自作朗読でレコードにしたそのジャケットに、この絵を使っています。これはね、なるほどって感じですけどね。



あとは、ちょっと時代が少しこの後、南画家たちで有名なところと言ったら浦上玉堂ですね。玉堂という人はで絵師で、もちろん侍だったんだけど、七絃琴の演奏に大変凝ったんですね。自分でその琴を、背中に背負って移動します。今でいうギターケースとかベースを入れるケースみたいだね。それで彼は岡山藩を結局脱藩し、京都に行ったり、あるいは福島の方に行ったりとか、結構全国を放浪するんです。息子に秋琴、春琴、二人の息子に琴って名前を付けて、その息子たちも引っ張ってね。



さてこの人物、これは江戸の人の谷文晁が描いた木村兼葭堂の肖像画。この肖像画いいですよ、谷文晁はじめ、当時の南画家たちはみんな全国あちこち行くわけです。風景を写生しに行くとか、人間的交流

もあるんですね。で、谷文晁は江戸の人なんだけど、しょっちゅう上方に来た。そのたびに大阪のこの木村蒹葭堂に世話になってるんです。この人は南画家でもあります。しかし、なんといってもコレクターなんです。蒐集活動も、まあ文人の一つの特徴でもあるんだけど、とにかくいろんなものを集める。書画骨董、美術はじめ、奇岩とかね。芥川龍之介は或るエッセイで、「木村蒹葭堂の収集物には、クレオパトラの金髪もあるかもしれない」なんてジョークを書いています(笑)。それからなんといっても、最後の文人画家と言われたのが、この富岡鉄斎です。鉄斎という人はとにかくたくさんの絵を描いてます。長生きしましたけどね。ただ本人は、わしは絵描きじゃないんだと言います。わしは学者であり、神官だと。実際にこの人はむやみと本をよく読んでるんです。本を集めてますね。有名なその「万巻の書を読み、万里を行く」ということを、富岡鉄斎はモットーにし、実践したわけです。結構いい年の時に北海道まで行って、まだ明治の初めぐらいですよ。交通の手段は本当に良くない時代；徒歩で基本的には歩くんですけどね。

女性の南画家の波多野華涯。一昨年ですか、ここで展示があって、この《蘭竹図屏風》六双一曲がここに並べられました。これは実に見事です。華涯は生まれたのは大阪だけど、教育を東京で受けるんです。跡見学園の最初の学生なんですね。とにかくこの人はね、本当に典型的というか、もう徹底した南画家で、賛に自分の漢詩を書く。華涯、漢詩集を出してますよね。正真正銘の女性南画家。また浜口陽三のお父さんの南画の先生です。お父さんはヤマサ醤油の当主であったんだけど、昭和の十年ぐらいからですか、貴族院議員の仲間を募って弟子入りして、華涯は岡山で晩年ずっと活動しましたけどね、上京した折や絵の見本を送るなどして、いろんな機会に習ったわけです。それからもっと前、波多野華涯は、若い頃から描いてたんだけど、二十歳の頃かな、和歌山の濱口家が所蔵する絵巻を模写するために厄介になるんですね。そしてさらに南紀に行って南紀の風景を描いてるんです。その時にですね、まだ十歳ぐらいだったその十代目の、浜口陽三のお父さんに、まだ少年だったお父さんに算術などを教えてるという縁もあるんですけどね。だから濱口家自体がやっぱり南画と縁が深いんです。華涯は昭和十九年まで、活動しました。そういうふうには、日本の中に、いろんな画家たちが生まれてきます。

そんな中でこの人物も紹介しておきたい、この人は、売茶翁。黄檗宗のお坊さんでしたが、この人がとにかく煎茶が好きで、京都の街を移動しながら、棒を担いで煎茶を売り歩いたんです。安く、お金ない人にはもうタダでもいいという感じで、で、この人の周りの交流圏には、蕪村がいて、伊藤若冲がいて、ビッグネームが、みんな集まってるわけです。煎茶がそこまで広まった一つには、それまでの茶道への反発もあったらしいですけどね。文人の生活、あるいは南画の背景には煎茶道があるっていうお話をしておきましょう。



さあ、そして明治になってから、しばらく南画受難の時代が起こります。どうしてかといったら、なんともいっても、美術界の近代化に対しては大変功績があったフェノロサがやってきて、日本の美術界をいろいろ刷新していくわけだけでも、フェノロサが南画否定派だったんですね。東京美術学校、芸大の美術部を作った段階で、最初の時点ではそこには南画科はなし、油絵科もなし。要するに南画というのは中国の匂いが強すぎるっていうので、どうもフェノロサは嫌ったみたいですね。もっと純粋な大和的なものの方がいいと。さらに油絵はヨーロッパのものだから、日本人に必要なないという感じでね。フェノロサって妙な近代主義者なんですよ。

基本的には大正になってからでしょう、南画が復権してくる。その大正十年にね、これは大体京都、関西が中心でしたけど、日本南画院が当時活躍していた主な南画家たちによって結成されました。中心メンバーの小室翠雲は東京の人なんですけどもね。それから矢野橋村。一般にもその南画が普及してって、昭和十一年には会員数が一万三千人と、これすごいですね。で、当時はね、やっぱりみんな漢詩も書いたんです。今現在本当に漢詩人って減ってるんですけど、昭和の初期には結構いたんですよ。

■南画的なるもの

去年、ここで現代の作家の中で南画のテイストのある人たちを五人集めて、展覧会をしました。それに関連して、美術史家の林道郎さんと私に対話をしました。道郎さんは「態度としての南画性」ということを強調します。要するに、南画のエッセンスというものを探っていったら、「雑食性」というものが指摘できると。これは他の日本画の様式、狩野派とかに比べてでしょうね。そもそも南画の成り立ちが南宋画の影響に加えて、ヨーロッパの遠近法や琳派ややまと絵の様式のほか、沈南蘋の細密画、そういうものも全部取り込んでいると。雑食と言え、さっき挙げた木村蒹葭堂は、書籍、骨董、動植物標本、奇石など幅広く収集し、それを知友らに憚りなく開陳しています。いろいろなものを取って消化する、そのバイタリティ

ーはまさに雑食性でしょうね。

そしてもう一つ、「運動性」、あるいは「逸脱性」。池大雅とか蕪村にしてからが、とにかく旅をする、移動する。それからさっきも挙げましたが浦上玉堂が藩を辞めて、自由な身になって境界にとらわれずにあっちこっち行き来するっていう逸脱性ね、これは確かに大きいでしょうね。南画的なるものの特徴です。そしてさらに今世界的に活躍している哲学者、ユク・ホイという人が書いた『芸術と宇宙技芸』、コスモテクニクスって彼は言ってますけども、山水画の山水的思考が大事だということを言い出しているわけです。西洋思考型と東洋思考型の対立を、ギリシャ悲劇的思考と山水画的思考の対立とすると。ヨーロッパの場合は真理が現前するわけです。神様のように現れてくる。それに対して東洋的思考は山水画的だから対立もなければ、現前もないわけです。林道郎さんは「ユク・ホイが定義している西洋思想と東洋思想、つまり老荘思想、山水を軸とした思想の出会いの予備的なリハーサルのようなものを南画の運動の中に見出せるのではないかと」考察しています。

そして南画を見直すということに関しては、新南画の運動があったんですよね。日本南画院の運動にさらに拍車をかけるっていう形で。そして著名な画家たちが何人も南画の可能性について言及したわけです。その代表的なのが萬 鐵五郎と橋本 関雪。橋本 関雪は、『南画への道程』という本を、大正の最後、1924年に出しました。これでこんなふうに使ってですね。「南画は写実主義でも印象主義でもない表現主義である。一個の人格がある物体を借りて、自己の魂を吹き入れるべく、内より外へ現れたる自己の表現である。」南画の復権に関しては、大変大事な人物であったことを、ちょっと紹介しておきましょう。(ミュゼ注 2 人の対談内容はミュゼ通信 84 をご覧ください。)

■〈南画の聖地、ここにあり〉＝紀州和歌山

さあそして本題になります。「南画の聖地ここにあり」 紀州和歌山。祇園南海を筆頭にして、和歌山が生んだ南画家、三大南画家がいます。そして祇園南海先生の墓。お寺が二十いくつか、集まった水道坂っていう坂のところにある寺町の妙法寺にあったんですが、アメリカ軍の爆弾が落ちて原形を留めなくなつたんで、墓石だけを並べている墓石の団地の一角に置かれてるんですね。そこから水道坂を三百メートルぐらい東の方に行ったら、護念寺という大きなお寺です。そこに紀州三大南画家のもう一人野呂介石のお墓があります。立派なお墓です。野呂介石は幼い頃から絵を始めて、池大雅に直々に学んだんですね。そして町民から後に武士になって、紀州徳川派のお抱え絵師になるんですけどね。野呂介石はまた弟子が多い。たくさん弟子がいました。その中の一人に濱口灌圃（はまぐちかんぼ）、ヤマサ五代目の当主もいます。三人目が桑山玉洲と言います。この人は、日本の美術史のことにかかなり通じて、自分でも画論を残してるんですね。美術評論家として仕事もしているという存在。この人のお墓は和歌山市の南の方の和歌浦の宗善寺にあります。この三人が紀州三大南画家です。 三人ともメジャーです。

2024 年の 10 月から 11 月にかけて、和歌山県立近代美術館で「仙境 南画の聖地ここにあり」という展覧会がありました。この図録にこういう項目があるんですね。「南画の風景 和歌山にあり」。まさしく熊野の方の風景が、中国における山水画の理想郷のような風景に重なってくると。実際、京都からも画家たちが南紀にやって来て風景を写していくという、そういうことが流行したわけですね。そして、和歌

山出身ということで、そういう南画の伝統を持った有力な近代美術家が生まれてます。以下に列挙しますと、川端龍子、下村観山。川口軌外、田中恭吉。そして建畠大夢、建畠寛造、浜口陽三、吉増剛造、となるでしょうか。

最後に、吉増剛造さんがいかに実は南画と間接的に関係してたかということをお話をしようと思うのですが、これに関しましては私は月に一回「吉増剛造ルネサンス」というレクチャーをしております。吉増詩集二十二冊を十回かけて全部読んでいこうという企画です。後半では吉増さんの出自を探ろうというので、先々週、和歌山の吉増家のルーツに行ってきました。和歌山の紀の川が流れるちょうど下流の土手にある永穂（なんご）村です。吉増家というと村中に十何軒あるんです。そしてこの永穂村に、和歌山で生まれ、明治に活躍した女性の南画家、川合小梅さんという人が出稽古に来てるんです。平凡社の東洋文庫の『小梅日記』、当時の庶民の女性が残した何十年間もの日記でかなり詳しいんです。これを読めば、しょっちゅう永穂の名が出てきます。明治13年4月22日には、永穂の山名六大夫家からの誘いによって赴き、酒をふるまわれ、絵の指導を行ない、宿に一泊。「永穂なる山名の高き宿に来てあかぬ遊びに短くぞ思ふ」。こんな歌を残しています。で、小梅さんね、お酒好きなんですね。そして明治13年10月10日から杉山佐五郎家に赴き、29日まで20日間滞在して襖絵を二十五枚描くとかやっています。山名家、吉増家ら有力な永穂村六家を中心に「南画」熱が生まれて、街の中心地から小梅を招き絵の講習会をしばしば開いていました。南画文化を永穂村に定着させてきたわけです。そういう存在が小梅さん。

そして、こういう南画的教養のあるところに吉増剛造も生まれたのではないか、というのが今日の最後のテーマです。吉増さんから昨年12月30日にいただいた速達の中で、こういう一節がありました。「幼きころ、永穂にて、芦セツ or 呉春をみた、家にあるのを朧ろな気が残っています」吉増家の本家にどうも絵が結構あったらしい、吉増家の本家から小梅の絵が最近になって5点発見されたという報告もあるんです。また『小梅日記』を読む会が、和歌山で今現在運営されているのですね。だから、そういう意味で女性南画家である小梅が、紀州の和歌山の永穂村にそういう足跡を残しているってことは事実です。野呂介石に師事した濱口灌圃以来の南画愛好が濱口家に伝わり浜口陽三を生んだように、川合小梅に南画を学んだ永穂村の美術愛好の文化風土が吉増剛造さんを準備したといえるのではないのでしょうか。

このあたりのこと、もうちょっと詳しく掘り下げたかったんですけど、時間になってしまいました。 どうもご清聴ありがとうございました。